



「菜の花や 月は東に日は西に」(与謝蕪村) 菜の花を間にまるで対面するようにお天道様とお月様を同時に見ることができるのは4月上旬ならでのことですね。途方もなく広大な宇宙に存在する吾。世界最小の詩の中に、至福のひと時を表している蕪村の素晴らしい感性です。

春はいつもなら生命力を感じる季節ですが、今年は少し様子が違います。人々は何となく気ぜわしくピリピリしています。そんな折、ふと立ち止まって自然の風物に目をとめてみると、少し心が落ち着くこともあるようです。今、人類は試されているのかもしれない。

屋根は語る

旧東方村(レイクタウン)や大間野町の中村家住宅に来館くださって、屋根に注目される方もいらっしゃいます。(現在は休館中)また市域の社寺の屋根に興味を持たれる方もいらっしゃるようです。今号では日本の伝統的な屋根について特集しました。

1 様々な素材

縄文時代の住居⇨竪穴住居を覆っていたのはイネ科の穂の長い植物でした。後に茅葺と呼ばれるものの原型です。やがて身分の上下が出てくると、祭祀を行う建物や貴人の住まいは屋根の葺き方が変わってきました。檜皮葺や柿葺き、板葺きです。その後には瓦葺が行われるようになりました。

檜皮葺 (ひわだぶき)

桧(ひのき)の皮を精製したものを少しずつづらしながら竹釘で止めて葺く屋根です。古代から(古墳時代以降)行われている方法です。

【例】京都御所の紫宸殿など、長野・善光寺 等

柿葺き (こけらぶき)

桧、サワラ、杉など、耐水性があり筋目の通った木を、幅10cm前後、長さ30cm前後、厚さ2~3mmの板にして少しずつづらしながら竹釘で止めて葺く方法です。中世(鎌倉期頃)から行われています。

【例】延暦寺の根本中堂、慈照寺の観音殿(銀閣) 等

茅 葺 (かやぶき)

「茅」とはイネ科で屋根を葺く草の総称です。ススキ、葦、稲わらなどを用います。近代(明治期以降)まで多くの住宅で使われました。旧東方村中村家住宅も元来は茅葺でした。(現在は防火のため、金属板葺きです。)

石置き板葺き

板葺き屋根に石を乗せた屋根です。これもかつては多くの住宅で見られた屋根です。板葺きは栗、サワラ、杉などを幅10cm前後、長さ80cm前後、厚さ5mmくらいの板にして葺いています。

瓦 葺

粘土を成形し焼成して作ります。防火性が高いのですが、重くなります。古代(古墳時代~平安期)では都の門や塀、社寺堂塔に使われました。中世では城郭などに用いられました。これらの屋根に葺かれた瓦は平瓦と丸瓦です。近世(江戸期)以降は庶民の間にも瓦は徐々に広まりましたが、平瓦と丸瓦を合わせたような棧瓦が多くなりました。これは平瓦に比べると小さく軽量です。(次の図と写真をご参照ください。)



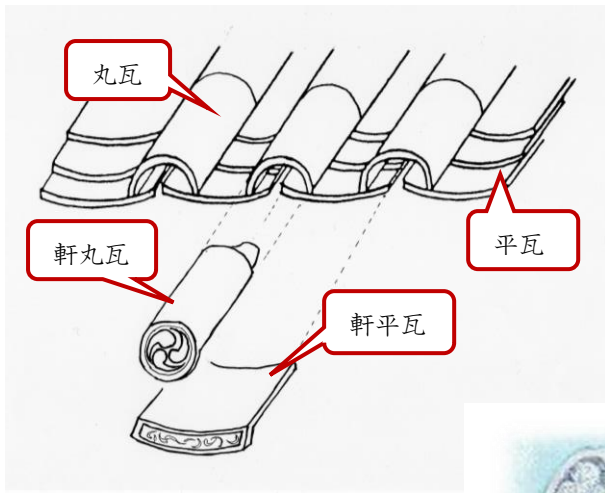
4月8日18時40分頃
元荒川にて



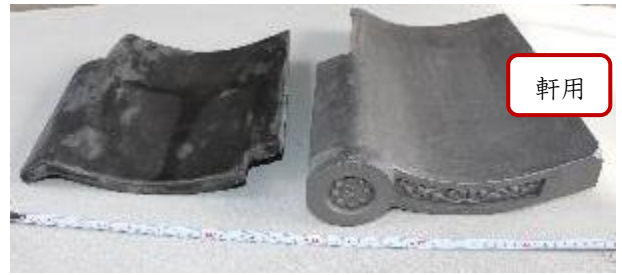
↑ 茅葺の旧東方村中村家住宅(見田方遺跡公園にあった頃)



↑ 石置き板葺きの曾根原家住宅(安曇野市)



瓦 様



2 鬼瓦

古代には獣面の瓦があったようですが、中世になると鬼面の瓦が現れました。室町期の鬼瓦は愛嬌のある顔のようです。その後には怖い顔の鬼になっていきます。鬼瓦は堂塔屋根の棟端

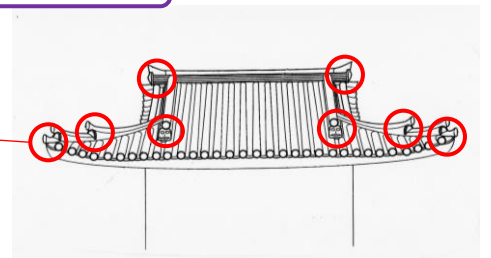


家紋のレリーフがあります。



ほうじゅ 宝珠

天嶽寺本堂の鬼瓦



○: 鬼瓦の場所

に据えられますが、どうしてそんな所に鬼をと思いますね。上の絵は市域の名刹天嶽寺本堂の鬼瓦です。額に宝珠をいただいています。宝珠には災難(疫病、天災、争乱等)を除き、濁水を浄化する霊験があるとされています。そうするとこの鬼は悪い鬼(災難など)を退ける鬼なのでしょう。近世以降、民衆の間にも瓦葺屋根が普及していくと、鬼面でない鬼瓦が用いられるようになっていきます。左の写真は大間野町中村家住宅のもので、総じて鬼瓦は堂塔やその地域その家の安寧を祈念したもののなのでしょう。

3 屋根の型

(1) 切妻造

「妻」は端のことです。屋根の端を切り落としたような形状なのでこのように言います。



↑ 切妻造(町家の石蔵)

(2) 寄棟造

棟(屋根の2つの面が合わさった峰の部分)が寄せられている形状の屋根です。



↑ 寄棟造

(大間野町旧中村家の長屋門)

(3) 入母屋造

寄棟造の上に切妻造の屋根を乗せた形状の屋根です。



↑ 入母屋造

(報土院の鐘楼)

(4) 方形(宝形)造

四角錐の屋根です。寺院では最長部に宝珠が乗っているものが多いです。



↑ 方形造(報土院本堂)

雨が多く湿度の高い日本の伝統的な屋根は、軒が深く造られています。特に寺社の堂塔は信仰の対象でもあったので、できるだけ永く存続できるようにするため、古来の匠たちによって様々な工夫がなされてきました。そこには先人たちの思想、人生観や死生観、世情の影響などが見られます。今そしてこれから私たちはどう生きていったらよいか、先人たちとその建築物がヒントを与えてくれるかもしれません。

【参考にした図書】・小林平一「瓦に生きる」(春秋社) ・関 美穂子「古建築の技 ねほり、はほり」(理工学社) 他